

The Wa (倭) -Paeckche (百濟) Relation and Silla (新羅) -Paeckche Alliance in 5th century

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-11-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熊谷, 公男 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24293

五世紀の倭・百濟關係と羅濟同盟

熊谷公男

はじめに

古代の日朝關係の研究に関しては、かつて日本では『大和朝廷による任那の植民地支配』を事実とみる説が通説であつたが、現在の日本の学界では、この学説はもはや完全に過去のものになつたといつてよい。また『日本書紀』の朝鮮關係記事には、編纂者である日本の古代國家が、自らの立場にそつた内容に改変を加えているということも、周知の事実になつてゐる。本稿も、こういった近年の日本の学界の研究動向を前提としてゐる。

本稿では、五世紀の倭と百濟の外交關係の検討を中心に行うが、その際に『日本書紀』の伝える倭・百濟關係の記述を可能なかぎり相對化して考えてみたいと思う。それには、『日本書紀』がふれていない事實を十分にふまえることが重要である。私は、最近、五世紀の倭・百濟關係には、主として『三国史記』が伝えるいわゆる『羅濟同盟』の存在が、倭と百濟の關係にも重要な影響を及ぼしてゐたのではないかと考えるよう

になつた。五世紀から六世紀にかけて存続した『羅濟同盟』は韓國の学界では周知のことであるが、日本の古代史学界ではあまり知られていない。そこで本論文では、韓國の学界の研究成果にも学びながら、五世紀の倭・百濟關係を、とくに『羅濟同盟』との関連という視点から改めて考えてみることにしたい。

五世紀の倭・百濟關係の具体的な検討に入るまえに、本論文の研究視角について簡単に述べておきたい。外交の目的が自國の利益（*national interest*）の追求にある限り、どのような國家、あるいは王權も独自の外交主体として外交活動を行うのであり、そのあり方を歴史的に明らかにすることが國際關係史の重要な研究課題であると考えている。そこで本論文では、五世紀の倭や百濟などの朝鮮諸國がそれぞれのどのようなことを外交課題とし、その実現のためにそれぞれの外交主体がどのような外交を行ったかをたどつていくことにしたい。

一、五世紀における倭と朝鮮諸国

最初に、五世紀を中心とした時期における倭および朝鮮諸国相互の関係を概観しておきたい。

四・五世紀の倭国にとって、加耶・百濟などの朝鮮諸国は先進文物・技術や鉄素材などの必需物資の供給元としてきわめて重要な意味をもっていた。一方、加耶・百濟などが倭国に求めた最大のもは倭国の軍勢力であった（熊谷公男二〇〇一）。倭国と朝鮮諸国との外交関係は、平野邦雄氏が指摘しているように、「来聘」「修聘」「通好」「和親」「請和」「結好」などといったことばで表される対等の「隣対国」としての関係を基本としていた（平野邦雄一九八五）。倭国にとって先進文物や必需物資の供給元としてとくに重要な意味をもっていたのは、金官・安羅などの加耶南部諸国と百濟であった。また五世紀後半～六世紀前半には、采山江流域の勢力（『馬韓勢力』¹）との関係も重要であったと思われる。

一方、四～六世紀の百濟にとって最大の軍事・外交課題は、ほぼ一貫して、北の強国高句麗との対抗であった。そのために百濟は、倭と提携することもあれば、新羅と『羅済同盟』を結成して、共同して高句麗に立ち向かうこともあった。

百濟の外交政策が、ときによってかなり大きく変わるのには、四世紀から六世紀にかけての新羅の国家としての成長と、それにとりまなう外交政策の変化が大きな要因になっていると考えられる。四世紀末、倭人の侵入によって苦境に立った新羅は高句麗の広開土王に帰服して救援をもとめた。広開土王はすぐさま五万の兵を派遣し、王都周辺にまで侵入して

いた倭兵を駆逐するとともに、任那加羅（金官国）にまで進軍した。このとき安羅の兵も高句麗軍と戦ったようである。これ以後新羅は、しばらくの間、高句麗に軍事的に従属することになる。その新羅が、高句麗からの自立と対抗の道を歩むようになるのは五世紀前半からである（木村誠一九九二）。そのとき新羅が百濟の呼びかけに応じて結成されたのが『羅済同盟』であった。『羅済同盟』は五世紀後半には有効に機能するが、六世紀に入ってから新羅が国力の発展を背景にして領土拡大策をとりはじめると、百濟ともしばしば軍事的に衝突するようになり、『羅済同盟』の重要性は急速に薄れていった（鄭雲龍一九九六・李在碩二〇〇四）。国家として統合されていなかった加耶諸国にとって最大の問題は、いかにして隣接する百濟や新羅に併合されることなく、独立を維持できるかということであった。そのため、加耶諸国はさまざまな方策をとる。金官・安羅などの南部加耶諸国は、倭との提携によって独立維持をはかり、大加耶を中心とした諸国は、『大加耶連盟』を結成して共同して周辺の国家に併合されることを防いだ（田中俊明一九九二）。

近年、もう一つの独立した地域勢力として注目されるようになったのが采山江流域勢力である。三世紀後半から六世紀前半にかけて、羅州市・靈岩郡・咸平郡などの采山江下流域を中心として、北は靈光郡などの西海岸地域から、南は海南郡などの南海岸地域にかけての全羅南道の西半部に独特な甕棺墓制が展開する（吉井二〇〇一）ことなどから、その間、この地域には加耶にも百濟にも属さない独自の勢力が存在していたという見解が有力になりつつある。これを倭の五王の官爵にみえる「慕韓」（馬韓）と結びつけて、馬韓の残存勢力と解する説も提起された。さらに

朝鮮半島ではこの地域でだけ五世紀後半～六世紀前半の前方後円墳が多数確認されているので、この地域勢力は倭とも密接な関係をもつていたと考えられる（田中俊明二〇〇二・東潮二〇〇二・朴天秀二〇〇二など）。

以上、五世紀を中心とした時期の倭および朝鮮諸国相互の関係を概観してみた。このような事実認識を前提としながら、以下において、五世紀の各時期における日朝関係を倭・百済関係、および「羅済同盟」を中心にみていくことにする。

二、五世紀初頭の朝鮮半島情勢と倭・百済関係

まず、五世紀の倭・百済関係をたどる出発点となる四世紀末～五世紀初めの状況を見ていくと、この時期は高句麗・広開土王による軍事攻勢が起点となって事態が展開して行く。広開土王碑によれば、百済は三九六年に高句麗に大敗し、その「奴客」となることを誓ったが、三九九年にはその誓いをやぶって、倭と「和通」したという。倭と百済の提携関係は、七支刀が示すように、すでに広開土王即位以前の三七〇年前後には樹立されていた。広開土王の軍事攻勢をうけて窮地におこまれた百済はそれをいったん破棄したが、ふたたび倭との提携の道を選ぶことになった。広開土王碑はそれを倭と「和通」したと表現したのである。

『三国史記』百済本紀には、阿莘王六年（三九七）に「王与倭国結好、以太子腆支_レ為_レ質」とあり、倭国に質を送ったという。『日本書紀』応神八年三月条にもこれに相当する記事があり、百済記を引用して「阿花王立无_レ礼於貴国」。…是以遣_レ王子直支于天朝。以脩_レ先王之好也」と

あるのがそれで、応神八年丁酉は干支二運修正するとまさに三九七年にあたり、「直支」とは腆支のことであるから、両記事は照応する。「无_レ礼於貴国」とは、すでに指摘されているように、百済の高句麗への帰服にともなう、倭との同盟関係の破棄を指すと考えられる。したがって太子腆支（直支）の入質は「結好」「脩_レ先王之好」、すなわち倭との同盟関係の修復のためであったと考えられる。「質」とはムカハリという古訓が示すように、王の身代りという意味で、「外交関係において相手国を裏切らない保証を与えた上で、特に強い政治的・軍事的な協力を働きかける」ときに送られるものである（山尾幸久一九八九）。百済が倭との同盟関係を修復するためには、このような重大な保証が必要とされたのである。

広開土王碑によれば、三九九年に新羅は平壤まで南下して来ていた広開土王のもとに使者を派遣し、「倭人満_レ其国境、潰_レ破城池、以_レ奴客_レ為_レ民」と倭兵の侵入を訴えたうえで、高句麗の救援を引き出すために、「帰_レ王請_レ命」と高句麗への従属の道を選んでいる。したがって高句麗との軍事対決の道を選んだ百済にとって、もはや残された同盟相手は倭国しか存在しなかったのである。この時期、百済が質を送ってまで倭国との軍事同盟の再結成を行ったのは、多分にこのときの国際環境の所産であったとみるべきであろう。

この時期、新羅も高句麗と倭に「質」を送っていた。『三国史記』によれば、奈勿王三十七年（三九二）に王族の実聖が高句麗に「質」として送られ、同四十六年（四〇一）に帰国しているし、その実聖が即位したのち、今度は奈勿王の王子卜好が実聖王十一年（四二二）に高句麗へ入質して

いる。また実聖王元年（四〇二）には、倭との「通好」に際して、奈勿王の王子未斯欣が質として送られている。このうち卜好・未斯欣兄弟の高句麗と倭への入質の話は、『三国遺事』金堤上伝に宝海・美海という名前で見えているが、入質の年代は一致しない。また未斯欣については、『日本書紀』神功紀にも新羅の質「微叱己知（微叱許智）」を奪還する話が見えている。したがって、これらの入質は事実であったとみてよい。その年代については問題が残るが、『三国史記』の腆支の入質の年紀が『日本書紀』所引の百濟本記のそれと一致することなどからみて、『三国史記』の伝える年代を基本に考えてさしつかえないと思われる。

そうすると、二度の高句麗への入質は高句麗への軍事的な従属の証しと考えて誤りないと思われるが、未斯欣（美海・微叱己知）の倭への入質はどのような目的で行われたのであろうか。『三国史記』朴堤上伝には、「四〇二実聖王元年壬寅、与倭国講和。倭王請以奈勿王之子未斯欣為質。王嘗恨奈勿王使己質於高句麗、思有以积憾於其子。故不拒而遣之」とあり、実聖王はかつて奈勿王が自分を高句麗に質として送ったことと恨んでいて、その子供に恨みを晴らそうと思って倭の要求を拒まなかったとされている。そういうことは十分に考えられるが、それにしてもこれが倭国との「講和」にともなう入質であったことは否定できない。広開土王碑によれば、新羅は四世紀末に倭兵によって王都をおびやかされてきたから、その軍事的脅威を取り除くために倭国と外交折衝を行って「講和」し、その見返りとしての入質であったとみてよいと思われる。

この新羅の高句麗と倭への入質は、まだ軍事的に弱小国であった新羅の苦しい選択であったが、見方を変えれば、新羅は高句麗に軍事的に従

属したのちも、独自の外交権を保持しており、自国の利益を守るためにさらに倭へも入質を行ったということになる。この時期の新羅は、基本的には高句麗の軍事的傘下に入って自国の防衛を図るが、その一方で倭国との講和もすすめるという外交政策を主体的にとっていたのである。

この時期の新羅と百濟は、『三国史記』百濟本紀阿莘王十二年（四〇三）七月条に「遣兵侵新羅边境」と、百濟が新羅を攻撃したという記事があるが、それ以外に軍事衝突を伝える史料は見あたらない。このことは、新羅が高句麗の軍事的傘下に入りながらも、その指揮のもとに高句麗の宿敵である百濟を側面から攻撃するという共同作戦をとってはいなかったことを示している。このことから、軍事的に高句麗に従属したあとの新羅といえども、決して高句麗と一体化したわけではなく、国家としての主体性は保持していて独自の軍事・外交を展開していたことがうかがわれる。このことは百濟も十分に認識していたと思われる。だからこそ、高句麗とは正面衝突を繰り返していた百濟も、新羅に大規模な攻撃をしかけることはなかったのである。

この時期に新羅が百濟ではなく倭と「講和」を行い、「質」を送ったというのは、百濟よりも倭を軍事的脅威とみていたからと考えられるが、これは実際にも新羅は倭兵の新羅領内への侵入に悩まされていたのに対して、百濟とは大規模な軍事衝突がなかったことによって裏づけられる。

三九七年に太子腆支（直支）が倭に入質し、「先王之好」を修した後の倭国と百濟の関係はきわめて良好であった。『三国史記』によれば、阿莘王十二年（四〇三）二月に百濟を訪れた倭国使に対して王が「迎勞」す

ること「特厚」であったという。さらに、同一四年(四〇五)に阿莘王が亡くなると、それを倭国で聞いた太子腆支は哭泣して帰国を要請したので、倭王は兵士一〇〇人をつけて護送した。百済の王都漢城では、仲弟の訓解が政治をとって太子の帰国を待っていたが、季弟の磔礼が訓解を殺して自立して王となっていた。太子が倭兵に護られて国境までくると、漢城の人の解忠が来ていて、王都の状況を伝え、軽々しく入国しないよう懇願した。そこで、腆支は倭人を留めて自衛し、海島に留まっていた時期をまった。まもなく国人が磔礼を殺して腆支を迎え、王位に即けたという。一方、「日本書紀」応神一六年(乙巳、干支二運繰り下げると四〇五年)は歳条では、天皇が直支を召して「汝返_ニ於_レ国_ニ以_レ嗣_レ位」と告げ、「東韓之地」を賜わって百済に遣したことになっている。直支がこのとき百済に帰国して即位したということは「三国史記」と一致し、事実とみてよいが、即位事情に関しては、「日本書紀」の記述は事実とは考えがたく、「三国史記」の方が真相を伝えているとみられる。

その後も腆支王五年(四〇九)に、倭国使が百済に「夜明珠」をもたらすと、王は「優礼待_レ之_ニ」したというし、ついで同一四年(四一八)には百済から倭国に使節が派遣され、白綿一〇匹が送られている。さらに毗有王二年(四二八)には倭国使が従者五〇人を引き連れて百済を訪れている。「三国史記」百済本紀では、これを最後に倭国との使節の往來の記録はとだえ、七世紀までまったくみられない。これは、直接的には「三国史記」編纂時における史料の残存のしかたに規定されたものと考えられるが、五世紀半ば前後は「日本書紀」にも百済関係記事がとぼしいので、両国の関係はある程度疎遠になったことは事実とみてよいであろう。

四世紀末〜五世紀初めは、倭国と加耶南部諸国、とくに金官国との関係がきわめて密接な時期であった。このことは、広開土王碑に倭兵とともに任那加羅(金官国)や安羅人の戍兵が登場することからもうかがわれるが、近年、考古学の分野からも指摘が相ついでおり、四世紀末〜五世紀初頭の初期須恵器は、基本的に金海・釜山から馬山・昌原にかけての加耶南東部〜南西部地域の陶質土器の系譜を引いているという見解が一般的である。そうすると、五世紀初頭における倭兵の新羅領への侵入の契機としては、百済との同盟関係とともに、金官・安羅などの要請ということも考えなければならぬと思われる。

以上、四世紀末〜五世紀初頭の倭と朝鮮諸国をめぐる外交関係をみてきた。この時期のもっとも大きな不安定要因は、南下策をとる高句麗とそれを阻止しようとする百済の武力衝突であった。百済は高句麗と対抗するために倭国と同盟を結び、倭兵の新羅方面への攻撃に期待をかけたが、新羅と直接戦火を交えることはほとんどなかった。新羅は、倭兵から国土を防衛するために高句麗に救援を仰いで倭兵を駆逐することに成功するが、高句麗に軍事的に従属することになる。しかし、一方では倭国に「質」を送り、その軍事的脅威を取り除こうとしている。金官・安羅などの加耶南部諸国にとって最大の脅威は、隣接する新羅であった。そこで倭国と提携し、さまざまな先進文物・技術や必需物資の供与の見返りとして、倭国の軍事力によって新羅の軍事的脅威から独立を守ろうとしたと考えられる。倭国からみると、この時期、先進文物・技術や必需物資の供給元として重要であったのは加耶南部諸国と百済であった。そこで自国の利益を追求するためにこれらの国と提携し、これらの国の要

請や独自の判断で半島南部で軍事行動を行う場合もあったと考えられる。

このように、この時期、倭国や朝鮮半島の高句麗・百済・新羅・加耶諸国は、それぞれ自国の利益を守るために主体性をもって周辺諸国・地域と提携あるいは抗争といった行動をとっていたのである。

三、羅濟同盟の結成と

朝鮮半島をめぐる国際関係の変化

羅濟同盟成立の端緒は、四三三・四三四年に百済と新羅が相互に使節を送り、聘物を取り交わしたことに求められる。「三国史記」によれば、最初に呼びかけたのは百済で、まず四三三年に新羅に遣使して和を請い、さらに翌四三四年には二度にわたって使節を遣わして、良馬と白鷹を新羅に贈っている。それに対して新羅は、同年一〇月に百済に黄金・明珠を「報聘」として贈って、両国間に講和が成立した。これが同盟結成の第一歩であった。

ついで四五〇年に、高句麗の辺将が悉直（三陟）で獵をしていたときに何瑟羅（江陵）城主の三直に襲われて殺害されるといふ事件が起こった。これに怒った高句麗は出兵するが、このときは新羅王の謝罪で事なきをえた。しかし、この事件が契機となって新羅と高句麗の関係は悪化していったとみられる。高句麗は四五四年に新羅の北辺を攻撃し、さらに翌四五五年には百済に侵攻するが、このとき新羅が救援軍を百済に派遣する。羅・濟両国が共同で高句麗の攻撃に立ち向かうのはこのときが初めてである。そこで、軍事同盟としての羅濟同盟はこのときに成立し

たとされている（鄭雲龍 一九九六）。

羅濟同盟結成の前提として、新羅の高句麗からの自立がなければならぬが、それは「質」として高句麗に遣わされていた卜好（宝海）が帰国したこと（『三国史記』）によれば四一八年、未斯欣が倭国から逃帰したのも同年とする。）が、高句麗傘下からの離脱の第一歩とみてよいであろう（木村誠 一九九二）。ただしその後も新羅は、高句麗への従属から完全に脱却することはできなかった。というのは、五世紀半ばに建立されたとみられる中原高句麗碑（篠原啓方二〇〇〇）では、新羅を「東夷」と記し、「高麗太王」が「寐錦」（新羅王）以下の新羅人に衣服を下賜し、「新羅土内」に高句麗の幢主（軍司令官）を派遣していたことなどがうかがわれ、新羅との間になお高句麗優位の関係を維持しているからである（武田幸男 一九八〇）。

また、羅濟同盟が結成されたとされる四五五年以降も、新羅は高句麗の軍事的影響を完全に排除できていなかったことを示す史料も存在する。『日本書紀』雄略八年（四六四）二月条によれば、このころ新羅は倭の攻撃に備えるために高句麗に派兵を要請したので、高句麗は精兵一〇〇人を新羅に派遣して王都を守備していたが、高句麗がひそかに新羅侵攻を計画していることを知った新羅が国内の高句麗人を殺害するという事件が起こったという。これによれば、五世紀後半になっても、新羅の王都には、少数ながら高句麗兵が駐屯していたということになる。『三国史記』によれば、五世紀半ば前後に高句麗が新羅を攻撃したのは四五四年と四六八年の二回だけであるが、のちにみるように、百済の熊津遷都後の四八〇～四九〇年代は、高句麗は新羅侵攻を頻繁に繰り返し、それ

に対して新羅はしばしば百済と共同して高句麗軍と戦うようになる。この段階に比べると、四六〇年代までは、まだ新羅と高句麗の対立は顕在化していなかったし、百済との同盟関係も強固なものではなかったと考えられる。しかしそうはいつても、四三〇年代以降の新羅の高句麗の傘下からの離脱と百済への接近という動きは、広開土王碑にみえる高句麗―新羅の同盟関係と百済―加耶―倭国の同盟関係との対立という朝鮮半島における対立の構図が大きく変わり始めたことを意味する点で重要である（李在碩二〇〇四）。

この四三〇年代前後は、東アジア諸国の外交関係の大きな転換期であった。倭国では四二一年に倭王讚が南朝宋に朝貢して、いわゆる「倭の五王」の宋との通交がはじまる。また、既述のように、「三国史記」で倭国と百済の通交がみられなくなるのが四二八年以降であるが、「日本書紀」においてもいわゆる百済三書にもとづくと思われる記事は、応神三九年（戊辰、干支二運繰り下げると四二八年）二月に百済の直支王が妹の新斉都媛を遣わしてきたという記事を最後に、雄略五年（四六一）四月条の軍君（昆支）の来朝記事までとだえる（ただし、雄略二年七月条に、己巳年（四二九）の倭国の要請に応じて百済が適稽女郎を送ってきたという「百済新撰」を引用した記事がある）。

【日本書紀】の「百済記」関係の記事は、一般に干支二運繰り上げる操作がされていると考えられるが、山尾幸久氏は、そのうち木羅斤資が登場する三つの記事（神功四九・六二年条、および応神二五年条）はさらに干支もう一運を遡らせているとしたが（山尾幸久一九八九）、これは

妥当と思われる。そうすると、神功六二年条の実年代は四四二年となるが、この記事は天皇が沙至比跪（葛城襲津彦）を遣わして新羅を撃たせたところ、沙至比跪は新羅の美女に惑わされて加羅国（大加耶と考えられる）を討つたため、加羅国王や臣下たちは百済に避難して厚くもてなされた、このことを聞いた天皇は木羅斤資に兵衆を率いさせて派遣し、加羅国を復興させた、という内容である。ここにみえる木羅斤資は百済の武将であるから、天皇が木羅斤資を派遣したというのは【日本書紀】の造作と考えられ、実際には百済が遣わしたのであろう。そうすると、四四二年に倭が大加耶を攻撃したのに対し、大加耶は百済に救援要請し、百済はそれに応えて木羅斤資を派遣して倭兵を掃討し、大加耶を再興したということになる（田中俊明一九九二）。

このように、四四〇年代には、かつて同盟関係にあった倭と百済の間に、大加耶をめぐる武力衝突が起きていたのである。すなわち、「三国史記」「日本書紀」ともに一致して倭と百済の使節の往来が途絶える四二八年ないし四二九年以降、倭・百済関係は実際にも疎遠になり、ときに武力衝突も起こっていたと考えられる。こうして羅済同盟への歩みの裏で、かつて同盟関係にあった倭・百済の関係は逆に疎遠になっていったのである。

この時期の倭の対外関係には、もう一つ大きな変化があった。それは加耶との関係である。前節でみたように、四世紀末～五世紀初めは倭国と加耶南部諸国、とくに金官国とは緊密な関係にあったが、それが五世紀前半を境に急速に変化していったとみられる。酒井清治氏によれば、それまで加耶南部地域の陶質土器の系譜を引いていた須恵器が、陶邑編年

のTK二一六型式の段階（五世紀前半）になると明らかに全羅南道の柴山江流域の系譜を引くものに転換するという（酒井清治二〇〇二）。このようなことから、「倭・韓の交渉・交易の韓側の中心的な担い手が、五世紀前半のある段階を境に加耶から全羅南道に移った」という想定も行われている（白石太一郎二〇〇四）。またこのころ、金官国が急速に没落するという指摘もされている。しかし文献史料からみるかぎり、五三二年に金官国主金仇亥が新羅に投降し、金官国が新羅に併合されたときに、新羅が仇亥一家に破格の待遇をしていることからみて、それまで金官国が加耶諸国の有力国として存続していたことは疑いないし、その滅亡後に倭国が百済や安羅などの加耶諸国とともに金官国の復興のために外交活動に力を尽くしていることからみて、倭国と金官国を初めとする加耶南部諸国との関係はその後もかなり重要な意味をもちつづけたと考えられる。ただ、五世紀の前半から加耶諸国のなかにおける金官国の相対的な地位が低下し、倭国との関係も以前に比べれば疎遠になっていくことは否定できないであろう。おそらくそのことが、新たに倭国が柴山江流域勢力との関係を重視していく直接の要因になったと考えられるのである。

いったん疎遠になった倭と百済の関係に変化のきざしが見られるのは雄略天皇期に入ってからである。「日本書紀」によれば、雄略五年（四六一）、百済の蓋鹵王は弟の軍君（昆支）を倭国に派遣してきた。同行した夫人が筑紫の各羅島で男児を出産したので島君（斯麻王）と名づけて本国に送還したが、この人物がのちに即位して武寧王となったという、有名な武寧王の誕生譚もこのときのものである。「日本書紀」所引の「百済

新撰」は、昆支の派遣目的を「以脩先王之好也」（下部兼石本によった。前田本・宮内庁本などには「兄王之好」とある）と記している。昆支はその後一五年以上にわたって倭国に滞在して五人の子をもうけ、四七五年の漢城陥落によって蓋鹵王が殺害された直後に本国に召還されたとみられ、四七七年に内臣佐平に任じられてまもなく死去している。

この昆支が倭国に派遣された理由は、「日本書紀」に修好のためとあるが、もう少し具体的に考えてみる必要がある。まず考えなければならぬのは、当時の百済が東アジア世界でおかれていた立場である。四七二年、百済は、それまでまったく国交のなかった北魏に突如として遣使をおこなった。その上表文の一節には「構怨連禍、三十餘載、財殫力竭、転自屢蹶。若天慈曲矜、遠及無外、速遣一将、来救臣国」（『魏書』百済伝）とあり、高句麗との三〇年以上にわたる戦禍によって百済の国が疲弊しているのを、救援軍を派遣してほしいという要請をしている。この要請は失敗に終わるが、百済の都漢城が高句麗の攻撃によって陥落するの、このわずか三年後の四七五年であるから、当時の百済が軍事的にいかにかきびしい立場におかれていたかがわかる。上表文によれば、高句麗との戦争は三〇年以上にわたって続いていたというから、四四〇年代以降、百済と高句麗は慢性的な戦争状態であったことになる。この間、百済は新羅と講和し、四五五年に高句麗が百済に侵攻したときには新羅が百済を救援したが、この時期に百済・新羅両国が共同で高句麗軍と戦ったのは、『三国史記』によるかぎりこのときだけであった。羅済同盟は、まだ十分に機能していなかったのである。

そこで高句麗の軍事的圧力を受けて苦境に立っていた百済は、四三〇

年代以降、いったん疎遠になっていた倭国との関係を修復し、以前のよう
に軍事的パートナーの役割を倭国に果たしてもらおうとして、王弟の
昆支を派遣してきたと考えられる。それが「以脩先王之好也」の具体
的な意味である。三九七年の腆支（直支）の入質が「結好」「脩先王之
好」といわれ、倭との同盟関係の修復を目的としていたのと同様に、こ
のときの昆支の来倭も同盟関係の再結成を呼びかけることが最大の目的
であったと考えられる。

ただし、朱甫暉氏が指摘しているように、蓋鹵王による昆支の倭国へ
の派遣には、百済王権内部の事情もあつたと考えられる。四五八年、百
済の餘慶（蓋鹵王）は宋に遣使して叙爵を要請したが、そのときに餘昆
（昆支）は行征虜將軍・左賢王を仮称していて、臣下では行冠軍將軍・右
賢王の餘紀とならぶ最高位にあつたと思われ、このとき征虜將軍を叙爵
されている。また「軍君」（コニキシ、大王の意）とよばれていることか
ら、百済王につぐ有力な王族であつたとみられる。その昆支が夫人同
伴で来倭し、その後一五年以上にわたつて倭国に滞在して五人の子を育
て、蓋鹵王の死後によりやく百済に帰国しているのは、外交使節という
形式をかりた有力者の追放（朱甫暉二〇〇三）という側面もあつた可能
性が高い。同様の例として、六四二年に倭国に派遣され、六六一年に百
済復興軍の將軍鬼室福信の要請によつて帰国するまで倭国に滞在した義
慈王の王子で太子であつた餘豊璋がある。

要するに百済が昆支を倭に派遣した目的は、倭国との関係を修復する
ことであつたが、それは、当時、百済がきびしい高句麗の軍事的圧迫を
受けていたことが背景にあり、さらにそれに蓋鹵王の専制体制確立のた

めの権力闘争も絡んでいたと考えられる。この昆支の来倭によつて、倭
と百済の関係は再び密接なものになつたと思われる。しかしこれ以降、四
七五年まで倭国が百済に救援軍を派遣した形跡はない。四世紀末～五世
紀初頭や六世紀前半のころのような「軍事同盟」という性格はまだ明確
ではなかつたのではなからうか。

四、熊津遷都後の倭・百済関係と羅済同盟

四七五年、高句麗の長寿王は、三万の兵を率いて百済の王都漢城を攻
撃した（『三国史記』新羅本紀はこれを慈悲王一七年（四七四）のことと
するが、同書高句麗本紀・百済本紀および『日本書紀』所引「百済記」は
すべて四七五年とするので、新羅本紀の誤りであろう）。高句麗軍は漢城
を包囲し、七日で北城を陥落させ、さらに南城を攻めた。窮地に追い込
まれた百済の蓋鹵王は、数十騎を率いて西門から逃走するが高句麗軍に
捕らえられ、阿且城に送られて殺害されてしまう。『日本書紀』雄略二〇
年条所引の「百済記」は、蓋鹵王の乙卯年（四七五年）の冬に、狗（高
句麗）の大軍が攻めてきて、七日七夜の攻撃によつて王城が陥落して尉
礼国（百済）は亡び、王及び太后・王子等はみな敵の手に落ちたと記し
ている。また『三国史記』によると、このとき、百済王は王子の文周を
新羅に派遣して救援を求め、新羅はそれに応えて救援軍を派遣するが、そ
の到着前に漢城が陥落してしまつたので救援は失敗に終わり、文周は木
笏（笏）満致・祖弥架取らとともに南に向かつたという。

王都漢城の陥落によつて百済はいったん亡んだのであり、難を逃れた
文周らによつて熊津を王都とした新生百済が誕生するのである。『日本書

紀』は、この百済の再興に倭国がふかく関わったと主張する。雄略二一年（四七六）三月条には、天皇が久麻那利（熊津）を汶洲王に賜い、百済国を救って再興したとあり、さらに同二三年（四七八）四月条によれば、百済の文斤王（三斤王）が薨去したので、天皇は当時倭に留まっていた昆支の第二子の末多王（東城王）を内裏に呼んで百済王に立て、武器を与えて筑紫（九州北部）の兵士五〇〇人を派遣して百済まで護送したという。要するに、文周王を熊津で即位させ、百済国を復興したのは倭王であり、東城王も倭王が倭国で擁立して百済まで送り届けたというのが『日本書紀』の記述である。

日本の古代史学界には、この『日本書紀』の記述にもとづいて、熊津遷都後の百済と倭国の関係をきわめて緊密であったとみる見解がある。たとえば山尾幸久氏は、かつて「百済王権の復興にヤマト王権が介入していたことには、疑問をさしはさむ余地がない」と述べたことがあり（山尾幸久一九八九）、また近年も「殆ど滅亡に近い状態であった百済王権の危局を、新羅や加羅が支援した痕跡は全くない。支援したのは倭王権のみである。……五世紀第4四半期に関しては、倭王が百済王を支えるものであった」と、この時期は古代の倭・百済関係のなかでも倭国に主導性があった特異な時期としてとらえ、そのような関係を背景にして東城王・武寧王代に百済に多数の倭国の有力者が送り込まれて臣下となり、その二世たちが欽明天皇期に百済の対倭交渉に登場する、いわゆる「倭系百済官僚」であったととらえている（山尾幸久二〇〇二）。

このように熊津遷都後の倭・百済関係は、倭系百済官僚の形成の問題やさらには韓国の前方後円墳の被葬者問題との関わりでも重要である。

そこで、本論文の最後にこの問題を検討してみたい。

まず文周王の即位への倭王権の介入であるが、これは『三国史記』の記述を基本的に認める限り、事実とは考えがたい。というのは、まず文周は高句麗軍が来襲してきたとき、蓋鹵王の命で救援要請のために新羅に遣わされたところから、この時点で百済がもつとも頼りにしていたのは新羅であったことになる。これは、五世紀半ばに羅済同盟が結成されていて、すでに高句麗軍を共同で防衛した経験があったことからすれば、当然であろう。しかも、漢城陥落後に文周王が熊津で即位したのは、たまたま新羅に救援要請にいついて難を逃れたからであって、彼を擁立したのはともに「南行」して熊津に行ったと考えられる木菟（木菟）満致・祖弥築取などの百済の貴族勢力であろう。また久麻那利（熊津）を汶洲王に賜い、百済国を再興して救ったというのも、当時、倭国が熊津を領有していたなどということは、とうてい考えがたいことであり、記述内容も具体性に欠けるので、『日本書紀』の随所にみられる日本本位の言説のひとつとみられ、事実とは認めがたい。

つぎに末多王（東城王）の即位と倭王権の関わりであるが、末多王は昆支の第二子であり、昆支が熊津遷都後まもなく本国に帰還したあとも、何らかの事情で倭国に留まっていたとみれば、即位当時、倭国にいたとする『日本書紀』の記述は不自然ではない。当時、百済は政情不安が続いており、四七七年には兵官佐平解仇が文周王を殺害して三斤王を擁立して全権を掌握するが、翌四七八年には自ら反乱を起こして真氏の軍に敗れて戦死している。そして四七九年にはさらに三斤王が薨去するのである。おそらくこのように本国で政争が相ついでいたので、昆支の子ど

もまたは倭国に留まっていたのであろう。ところが三斤王の死によって文周王の系統がとだえたので、蓋鹵王の弟であった昆支の子どもたちのなかで「胆力過人」と評された(『三国史記』)末多王が倭国から召還されることになったのではなからうか。『日本書紀』はその即位を、雄略天皇が内裏によんで王につけたと記しているが、これまた『日本書紀』の常套の筆法であり、簡単に信用するわけにはいかない。

この記事の信憑性を考えるにあたって参考になるのが、さきに取り上げた腆支(直支)王の事例である。『日本書紀』応神一六年条では、天皇が直支をよんで帰国して王位を継ぐように命じて、「東韓之地」を賜わって百済に遣したとあるのに対して、これに対応する『三国史記』百済本紀阿莘王一四年(四〇五)条では、阿莘王が亡くなったことを倭国で聞いた太子腆支が帰国を要請したので、倭王は兵士一〇〇人をつけて百済まで護送し、国人がそれを迎えて王位につけたとある。さきに述べたように、これは基本的に『三国史記』の方が真相を伝えているとみられるが、そうすると実際には倭国に滞在していた王子が百済側の要請によって帰国し、即位した場合でも、『日本書紀』は天皇が王位につけたと記していることになる。この事例を参考にすれば、末多王(東城王)の場合も、本国から即位のための帰還要請があったので、倭国はそれに同意し、本国の政情が不安定であったために、五〇〇人の兵士を護衛につけて本国に送還したというのが真相ではないかと思われる。東城王の即位事情をこのように考えてさしつかえないとすると、その即位は百済の主體的な決定によるものであり、倭王権はそれに協力しただけということになる。

かりに東城王の即位が倭国主導のもとに行われたとすれば、そのあと倭国の百済に対する影響力が強まり、軍事的な協力関係も強化されたはずであるが、そのような形跡はほとんどみいだすことができない。

百済の熊津遷都以後に相当する五世紀の第4四半期は百済と新羅の關係がきわめて友好的で、羅濟同盟がもつとも効果的に機能する時期にあたっている。四八一年に高句麗が靺鞨とともに新羅の北辺を攻撃したときには、百済と加耶(大加耶)が新羅軍とともに防戦して撃退しているし、四八四年の高句麗の新羅への攻撃のときにも、新羅・百済両軍が母山城付近で共同して高句麗軍と戦い、これを撃破している。さらに、四九四年には新羅の將軍実竹が高句麗軍と戦うが苦戦し、包囲されてしまいが、百済の東城王が三千の軍隊を派遣して新羅軍の救出に成功するし、翌四九五年には百済の雉壤城が高句麗軍によって包囲されたので、新羅に救援要請したところ、新羅の將軍德智が兵を率いて救援に向かい、高句麗軍を撃退して百済を救ったという。またこの間、四九三年に百済の東城王は、新羅に使者を遣わして請婚し、伊飡比智の娘を妻として迎えている。ここに羅濟同盟は一步進んで「婚姻同盟」になるのである。このように四八〇〜四九〇年代は、軍事同盟としての羅濟同盟の絶頂期であり、百済・新羅両国は共同してたび重なる高句麗軍の攻撃をことごとく撃退するとともに、婚姻同盟によって両国の關係をさらに密接なものにするのである(鄭雲龍 一九九六・朱甫暎 二〇〇三・李在碩 二〇〇四)。おそらく、百済の王都の陥落をみた新羅が、高句麗の軍事的脅威を痛感し、いままで以上に百済との軍事的提携を強める方針に切り替えたこと

が、羅済同盟の強化になったのであろう。一方、この時期の百済と倭国の関係については、意外にも両国が親密であったことを示す確実な史料はほとんど残されていない。逆に『日本書紀』武烈六年（五〇四）一月条には「百済歴年不脩貢職」とあり、五世紀末以降、百済と倭国の関係が疎遠になったことを示唆する史料も存在する。

このようなことから李在碩氏は、東城王代（四七九—五〇一）の百済は新羅との軍事同盟がうまく機能していたので、百済からみれば倭国の重要性は低下したとみており、それが武烈紀の「百済歴年不脩貢職」という記事の背景ではないかと考えている（李在碩二〇〇四）。私はこの見解に賛成である。東城王は倭国で生まれ育ち、倭国の協力によって即位したことは事実とみてよいが、これは倭国の百済王権への介入を意味するものではなく、即位後の東城王がもつとも重視したのは新羅との同盟関係であったのであり、しかもそれは戦略的にはかなり成功したとみてよい。そのようなときに、倭国に従属し、軍事的な同盟関係を結んでいたとは考えにくいし、事実、そのようなことを裏づける史料はないといってよい。したがって、この時期を倭・百済関係において倭が優位に立っていた特異な時期とみる山尾氏の見解には賛同しがたいし、そのような見方を前提にした倭系百済官僚の成立についての山尾氏の理解についてもしたがいがたい。

むしろこの時期の倭国は、近年注目をあびている柴山江流域の前方後円墳の存在からみて、柴山江流域勢力との関係を深めていったと考えたほうがよいと思われる。あるいは、この柴山江流域勢力を介して百済とも活発な交易を行っていた可能性も考えられるが、羅済同盟の推移をふ

まえるかぎり、この時期に倭国と百済の間に軍事的な同盟関係を想定することは困難であろう。

倭国と柴山江流域勢力との交流の主体について、九州などの地方勢力を想定する見解もあるが、筆者には日本列島と柴山江流域勢力との交流に倭王権がいつさい関与していなかったとは考えがたい⁵⁾。両地域の交流は九州の在地勢力の独自の動きからはじまった可能性が高いと思われるが、交流の重要性が高まった段階からは倭王権が九州の勢力にさまざまな指示を出したり、倭王権の有力な人物が九州の勢力を率いて交易を行ったりする、という形になったのではないかと推測している。

おわりに

以上、韓国の古代史研究で重要視されてきた「羅済同盟」の推移をふまえ、なおかつ当事国それぞれの外交主体としての活動を重視する立場から五世紀の倭・百済関係をみてきた。まだまだ考察が不十分であるが、最後に六世紀への見通しを述べて、むすびにかえることにしたい。

六世紀の最初の年である五〇一年、婚姻同盟まで結び、有効に機能していた羅済同盟にかけりが見えはじめる。『三国史記』には、この年の七月条に「設柵於炭峴、以備新羅」とあり、百済が新羅に対して防備を固めはじめるのである。鄭雲龍氏は、四五五年から五〇〇年までは羅・麗間に七回、済・麗間に四回の戦闘の記事があるのに対して、五〇一年から五五〇年までは、済・麗間にだけ一〇回の戦闘記事が見られ、五〇〇年を境にして高句麗の主要交戦相手国が新羅から百済に変わっているということと、羅済同盟軍の共同防衛は五〇〇年以前が五回確認できる

のに、五〇一年以降は一回しか行われていないことを指摘して、五〇〇年以前を羅済同盟前期、五〇一年以降を羅済同盟後期に区分している(鄭雲龍一九九六)。すなわち六世紀に入るとともに羅済同盟の存在意義は低下していき、百済の聖王が戦死した五五四年の新羅の管山城での戦闘で、同盟は完全に崩壊すると考えられている。

六世紀初頭以来の新羅の発展はめざましく、領土も拡大していくが、そのような趨勢のなかで新羅はしだいに軍事的パートナーとしての百済を必要としなくなっていくことが、羅済同盟の意義が低下していく最大の要因であったと思われる。一方、百済はそうした流れのなかで、再び倭国と軍事同盟を模索するようになる。また倭国は、四七八年の倭王武(雄略天皇)の南朝宋への朝貢以来、中国との通交がとだえており、先進文化の供給源としての百済の重要性は高まっていたと考えられる。こうして、倭・百済両国の利害が一致し、継体天皇・武寧王の時代に、ふたたび倭・百済の間に同盟関係が成立すると考えられるのである。

要するに、百済にとって軍事同盟の相手は決して倭国のみではなかったのである。百済のもっとも望ましい軍事的パートナーはむしろ隣国の新羅であったとみるべきであろう。百済は、新羅との軍事的提携が困難なときに倭国への接近策をとり、倭国の側も、百済が倭国を軍事的パートナーとして必要としているときには、おおむね先進文物・技術などの供与と見返りにそれに応じた。しかし倭国にとつても、百済は先進文物・技術などの唯一の供給元ではなかった。加耶諸国・栄山江流域勢力や中国王朝、さらの場合によっては新羅・高句麗もまた先進文物の供給元として重要な存在であったのであり、時期によっては百済よりもこれらの

国家あるいは地域との関係を百済よりも緊密にすることもあったのである。

註

(1) 筆者は、現段階では「馬韓勢力」という呼び方は、あくまでも仮称にとどまると考えている。ただし、栄山江流域に三世紀後半から六世紀前半にかけて独自の専用甕棺墓制が展開することなどから、この時期に栄山江流域一帯が相対的に自立した勢力を形成していたということ自体は認めるべきであると考ええる。このような在地勢力を倭の五王の官爵にみえる「慕韓」に結びつけて「馬韓勢力」と呼称することが妥当かどうかは、なお検討すべき問題が残されているが、その可能性まで否定すべきではないであろう。また倭の五王の官爵にみえる「秦韓」に関しては、その実在を示す文献的根拠は確かに存在しないし、朴天秀氏によれば、「秦韓は考古資料から証明しにくい」ということであるので(朴天秀二〇〇二「栄山江流域の古墳」『東アジアと日本の考古学』1、同成社)、現段階ではその実在は証明されていないといえよう。

(2)

報告の際に、李在碩氏から、加耶と倭が密接な関係をもっていたことは明らかであるが、それと政治的な関係の形成は別の問題であり、政治的關係において重視すべきなのは、むしろ加耶と百済との関係ではないか、という質問を受けた。氏はさらに、「日本書紀」神功四九年条や同書同欽明二〇五年条の聖明王の回顧談などを根拠に、四世紀後半ごろから加耶諸地域に百済の影響力が及んでいたとする見解を提示した。本論文で百済と加耶の關係にほとんどふれなかったのは考察が行き届かなかったことによるもので反省しているが、筆者は、李在碩氏が提示した史料から四世紀後半段階に百済が加耶地域に政治的影響力をもっていたとまでみることはできないのではないかと考えている。神功紀四九年条は百済記を用いて記述されているが、そのほかに日本側の史料もつかわれており、さらに「日本書紀」の編者の作爲もあつたと考えられる、複雑な成り立ちの史料であることが明らかとなっている。さらに、その実年代に関しては、従来、百済記が用いられていることから干支二連分の二二〇年繰り下げて三六九年のこととしてその信憑性が議論されてきたが、日本の学界では、近年、木羅斤資がみえる記事に関しては干支をもう一連繰り下げて考える(二四二九年)説が有力視されている。この記事のなかに百済の將軍木羅斤資らが精兵を率いて卓淳に終結して新羅を攻撃して破り、ついで南加羅・安羅・卓淳・加羅

などの七国を平定した話が見えるが、この記事は、百済の軍隊がいったん卓淳に集結して新羅を撃った後で、その卓淳を含む七国を平定したとあって、話に矛盾があり、さらに金官を「南加羅」、大加耶を「加羅」とよんでいることなど、当時の歴史的事実として疑わしい点が少ないので、最近の日本の学界では『日本書紀』の造作と見る説が一般的であり(田中俊明一九九二など)、筆者もそのような見解に賛成である。

つぎに、欽明天皇二一五年条にみえる聖明王(聖王)の回顧談は、聖明王が加耶諸国の早岐らに速古王(近肖古王)・貴首王(近仇首王)代の友好関係を強調して、そのような昔の関係を戻らうと呼びかけたもので、現実の利害関係が絡んでおり、事実か否かは慎重な検討を要すると思われるが、基本的には事実にもとづいた話とみてよいと考える。ただしその関係は、「親好」「和親」「子弟」「兄弟」などと表現されているので、基本的に対等の友好関係にとどまるとみるべきであろう。

欽明紀の聖明王の回顧談に対応した記事が、神功紀四六年条とみられるが、この記事は甲子年(四六四)に百済の使節がはじめて卓淳に至り、その卓淳の仲介で二年後に倭国の使者が百済に行つて、倭国と百済の通好がはじまつたという内容である。この、加耶の一國である卓淳の仲介で倭国と百済の国交がはじまつたという話は、田中俊明氏が述べているように(田中俊明一九九二)、大筋で事実とみてさしつかえないと考えられる。そうだとすれば、これは四世紀代に加耶諸国と倭国の間に外交関係があつたことを示していることになる。一般論としても、すでに百済と正式の外交関係を樹立していた倭王権が、それよりも日本列島に近いところであり、かつ先進文化・技術の供給元としてきわめて重要な存在である加耶諸国に政治的な関心をもち、王権と無関係な地方勢力に交流を委ねていたというようなことは考えがたいと思われる。

李在碩氏は、当初の倭・百済関係を軍事同盟の性格をもたない友好関係とし、それが三九七年の太子腆支の倭への入質によって軍事同盟に切り替わつたとみているが(李在碩二〇〇四)、筆者は三九七年以前から倭国と百済の関係は軍事同盟であつたと考えている。というのは、第一に、本文にも引用した『日本書紀』応神八年条所引の百済記に、王子直支(腆支)を送つたのは「脩先王之好」、すなわち先王の時代に結んだ友好関係の修復であつたとあって、このときの入質が以前の両国関係の再現を目的としていたとみられるし、第二に、倭国と百済が外交関係を樹立した三七〇年前後は、ちょうど百済が高句麗と激戦を繰り返して、百済が軍事的パートナーを必要としていた時期と考えられるから、倭国と国交を樹立したのは、やはり倭国の軍事協力を得ることが目

(3)

(4)

的だったとみた方がよいと思われるからである。ただし、太子腆支の倭への入質以後は、以前にも増して倭・百済関係が親密になつたということは認めてよいと思われる。三九七年以降、四二〇年代までは、おそらく四〜五世紀で倭・百済関係がもつとも良好な時期だったのではないかとみられる。

このような見解に対して、報告の際に、李在碩氏から、神功六二年条の記事を四四二年の事実として認められるかの問題はともかく、この史料から倭国が大加耶を攻撃したことを事実とみることができるとは、むしろ五世紀半ばに、倭国が内陸に位置する大加耶を攻撃したと考えるのであれば、そのようなことがいかにして可能であつたのかを説明すべきではないかという質問を受けた。

これはたしかに重要な質問であると思う。現段階で筆者は、この質問に十分に応えることはできないが、だいたい以下のように考えている。すなわち、まずこの記事は百済記を引用しているので、一定の信頼性があると考えられる。記事中に説話的な内容の部分があることは事実であるが、沙至比麗(葛城襲津彦)という倭国の武將が登場することは軽視できないと考える。確かに、倭国が大加耶を攻撃するためには周辺の加耶諸国の協力が必要になるが、その可能性はあると考える。一つは、五世紀代の安羅との関係は史料が残つておらず不明確であるが、友好関係が継続していた可能性が高いと思われるし、金官国も五世紀代に滅亡したわけではないので、倭国との関係は継続していたと思われる。これらの加耶南部諸国が倭国の大加耶に対する軍事行動に協力したという可能性は否定できないであろう。また倭軍が高句麗との交戦以降の五世紀代に加耶南部地域に駐屯していたのかも、確かなことはわからないが、雄略紀八年二月条にみえる「日本府行軍元帥」が事実を反映したものなのかどうかなどをふくめて、今後の課題としたい。

その根拠としては、まず第一に埼玉県稲荷山古墳出土鉄剣銘と熊本県江田船山古墳出土大刀銘に共通する「獲加多支爾大王」の銘文から、五世紀後半のワカケル大王Ⅱ雄略天皇の時代には、すくなくとも関東から九州中部までは倭王権によって統合されていたと考えられること、第二に酒井清治氏によれば、五世紀前半(陶邑窯編年のTK二一六型式の段階)を境に、日本列島の須恵器の製作技術がそれまでの加耶南部地域の陶質土器の系譜を引くものから柴山江流域の陶質土器の系譜を引くものに転換するというのが、この時期はちょうど倭王権の直営とみられる陶邑窯跡群を中心とする生産体制が整う段階にあつたといえるので、倭王権は柴山江流域の陶質土器の技術を積極的に導入していたと考えられること、などである。

(5)

付記・本稿は、二〇〇六年五月四日に忠南大学校百濟研究所において開催された「百濟公開講座」で報告した原稿に若干の修正と注を加え、「百濟研究」第四四輯（二〇〇六年八月）に掲載させていただいた論文の日本語文である。注は、報告の討論者である李在碩氏からの質問に対する回答を中心に記した。討論者をお引き受け頂いた李在碩氏には心より感謝申し上げたい。また、報告原稿の作成にあたって、韓国語文献の収集と翻訳で高麗大学校古環境研究所の山本孝文氏と東北大学大学院の金銀貞氏のお世話になった。合わせて感謝の意を表したい。なお、本論文は私立大学学術研究高度化推進事業・オープンリサーチセンター整備事業「アジア流域文化論研究プロジェクト」（研究代表者・細谷良夫）における韓国流域文化調査の成果の一部である。

《参考文献》

(日本語文)

- 東 潮 二〇〇二「倭と采山江流域―倭韓の前方後円墳をめぐって―」（朝鮮学会編『前方後円墳と古代日朝関係』同成社）
- 熊谷公男 二〇〇一「大王から天皇へ」（日本の歴史〇三）講談社
- 木村 誠 一九九二「新羅国家生成期の外交」（『アジアのなかの日本史』二、東京大学出版会、のちに『古代朝鮮の国家と社会』（吉川弘文館、二〇〇四）に収録）
- 木村 誠 一九九七「中原高句麗碑立碑年次の再検討」（武田幸男編『朝鮮社会の史的展開と東アジア』山川出版社、のちに『古代朝鮮の国家と社会』に収録）
- 酒井清治 二〇〇二「倭における須恵器生産の開始とその背景」（『駒澤大学文学部研究紀要』六〇）
- 白石太一郎 二〇〇四「もう一つの倭・韓交易ルート」（国立歴史民俗博物館研究報告 一一〇）
- 武田幸男 一九八〇「五〜六世紀東アジア史の一視点―高句麗―中原碑―から新羅―赤城碑―へ」（『東アジア世界における日本古代史講座』四 学生社）
- 田中俊明 一九九二「大加耶連盟の興亡と「任那」―加耶琴だけが残った―」（吉川弘文館）
- 田中俊明 二〇〇二「韓国の前方後円形古墳の被葬者・造墓集団に対する私見」（朝鮮学会編『前方後円墳と古代日朝関係』同成社）
- 朴 天秀 二〇〇二「采山江流域における前方後円墳の被葬者の出自とその性格」（『考古学研究』四九一）
- 平野邦雄 一九八五「大化前代政治過程の研究」（吉川弘文館）

山尾幸久 一九八九「古代の日朝関係」（『槁選書』槁書房）

山尾幸久 二〇〇二「五、六世紀の日朝関係―韓国の前方後円墳の「解釈」―」（朝鮮学会編『前方後円墳と古代日朝関係』同成社）

吉井秀夫 二〇〇一「采山江流域の三国時代墓制とその解釈をめぐって」（『朝鮮史研究會論文集』三九）

(韓国語文)

정운용 一九九六「羅濟同盟期 新羅와 百濟 關係」（『白山學報』四六）

이재석 二〇〇四「五세기 백제와 倭國의 관계」（『百濟研究』三九）

주보은 二〇〇三「熊津都邑期 百濟와 新羅의 關係」（『충남대학교 백제연구』

『古代東亞細亞와 百濟』）

篠原啓方 二〇〇〇「中原高句麗碑」의 釋讀과 內容의 意義」（『史叢』五一）